

名前 () 日づけ (/) できた数 (/28)

使い方 まず本文を声に出して読み、「」と『』の対応で「どのセリフが誰の言葉か」を確かめてから、傍線の番号を手がかりに解きます。この話の山は「敬語の方向」と「会話の主語」、そして「なり」の識別です。

あらすじ＝俊恵法師が、当時の歌壇の第一人者であった大歌人・藤原俊成（五条三位入道）を訪ね、「ご自身ではどの歌が一番すぐれているとお思いですか」と尋ねる。俊成は「夕されば野辺の秋風身にしみてうづら鳴くなり深草の里」を自分のおもて歌（代表歌）に挙げ、世間で評判の「面影に…峰の白雲」よりも上だと答えた。ところが俊恵は、あとで弟子の鴨長明にこっそりと、第三句「身にしみて」は言いすぎで趣が浅くなったと批評する。そして自分のおもて歌「み吉野の山かき曇り…」を示し、言い尽くさず余情で感じさせる歌こそよい、という理想を語った。

一次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

俊恵（しゅんゑ）はいく、「五条三位入道（ごでうのさんみのにふだう）のもとに①詣（まう）でたりしついでに、『御詠（ぎよえい）の中には、いづれをかすぐれたりと③思（おぼ）す。よその人さまさまに定め侍（はべ）れど、それをば用ゐ侍るべからず。まさしく承（うけたまは）らむ』と④聞こえしかば、

『夕されば野辺（のべ）の秋風身にしみて⑤うづら鳴くなり深草の里 これをなむ、身にとりてはおもて歌と⑥思ひ給（たま）ふる』と言はれしを、

俊恵又はいく、『⑦世にあまねく人の申し侍るは、「面影（おもかげ）に花の姿を先立てて幾重（いくへ）越え来（き）ぬ峰の白雲」、これをすぐれたるやうに申し侍るはいかに』と聞こゆ。『⑧いさ、よそにはさもや定め侍るらん。知り給へず。なほみづからは、先の歌には⑨言ひ比ぶべからず』とぞ。

これを⑩うちうちに申ししは、「かの歌は、『身にしみて』といふ⑪腰（こし）の句いみじう⑫無念（むねん）におぼゆるなり。これほどになりぬる歌は、⑬景気（けいき）を言ひ流して、ただそらに身にしみけむかしと思はせたるこそ、⑭心にくくも優（いう）にも侍れ。いみじく言ひもてゆきて、歌の詮（せん）とすべきふしを、さはと言ひあらはしたれば、⑮むげに」と浅くなりぬる」とぞ。

さて、俊恵が自賛歌（じさんか）は、『み吉野の山かき曇り雪降れば麓（ふもと）の里はうち時雨（しぐれ）つつ これをなむ、かのたぐひにせむと思ひ給ふる。もし世の末に、おぼつかなく言ふ人もあらば、「かくこそ言ひしか」と語り給へ』とぞ。

語注 五条三位入道＝藤原俊成（ふじわらのしゅんぜい）。当時の歌壇の第一人者。出家後の呼び名。俊恵＝鴨長明の和歌の師。おもて歌＝その歌人の代表作。人前に出せる看板の歌。深草の里＝京都・伏見のあたり。うづらの鳴く、もの寂しい里として歌によまれた。面影に花の姿を先立てて…＝世間で評判の高かった、俊成のもう一つの歌。詮＝眼目。いちばん肝心なところ。さは＝それは。そのようにはつきりと。自賛歌＝自分でよい出来だと思っている自慢の歌。み吉野＝奈良県の吉野。雪の名所。※「これをうちうちに申しし」の相手は、この話を書きとめた鴨長明である。

おもて歌

A 語句の意味と読み (1~7)

- (1) ①「詣(まう)でたりし」の「詣づ」は、どの動詞の敬語で、敬語の種類は何か。意味もあわせて書け。
- (2) ②「御詠」の読みを現代仮名遣いで書け。また意味も書け。
- (3) ③「世にあまねく」の「あまねし」の意味を書け。
- (4) ④「うちうちに」の意味を書け。
- (5) ⑤「無念(むねん)におぼゆるなり」の「無念なり」の意味を書け。
- (6) ⑥「景気(けいき)を言ひ流して」の「言ひ流す」の意味を書け。
- (7) ⑦「心にくくも優(いう)にも侍れ」の「心にくし」と「優なり」の意味をそれぞれ書け。

B 文法 (8~13)

- (8) ⑧「思(おぼ)す」は、どの動詞の敬語か。敬語の種類と意味も書け。
- (9) ⑨「聞こえしかば」の「しか」は何の助動詞の何形か。また「ば」が表す意味を書け。
- (10) ⑩「うづら鳴くなり」の「なり」は何の助動詞か。そう判断できる理由も書け。
- (11) ⑪「思ひ給(たま)ふる」の「給ふ」は何行何段活用か。四段の「給ふ」との違いも書け。
- (12) ⑫「思ひ給(たま)ふる」が連体形になっているのはなぜか。理由を書け。
- (13) ⑬「心にくくも優(いう)にも侍れ」の「侍れ」が已然形になっているのはなぜか。

C 主語・指す内容・敬意の方向 (14～17)

(14) ①「詣(まう)でたりし」の動作をしたのは誰か。また、この敬語は誰に対する敬意か。

(15) ④「聞こえしかば」の主語は誰か。また、誰から誰への敬意か。

(16) ⑧「いさ、よそにはさもや定め侍るらん」は誰の言葉か。

(17) ⑪「腰(こし)の句」とは和歌の第何句か。また、ここでは具体的にどの語句を指すか、本文から抜き出して書け。

D 口語訳 (18～21)

(18) ⑥を含む「これをなむ、身にとりてはおもて歌と思ひ給(たま)ふる」を口語訳せよ。

(19) ⑧「いさ、よそにはさもや定め侍るらん」を口語訳せよ。

(20) ⑬「景気(けいき)を言ひ流して」を口語訳せよ。

(21) ⑮「むげにこと浅くなりぬる」を口語訳せよ。

E 内容・記述 (22～25)

(22) ⑨「言ひ比ぶべからず」とあるが、俊成は世間で評判の「面影に…峰の白雲」の歌を、自分のおもて歌とくらべてどう考えているか。三十字以内で書け。

(23) ⑩「うちうち」とあるが、俊恵はこの批評を誰に語ったのか。また、それは俊成に面と向かって言ったものか。本文の言葉をふまえて書け。

(24) ⑬「景気(けいき)を言ひ流して」とあるが、俊恵が自分のおもて歌として挙げた「み吉野の山かき曇り雪降れば麓の里はうち時雨つつ」は、この考えをどのように実現しているか。四十字以内で書け。

(25) ⑮「むげにこと浅くなりぬる」とあるが、俊恵は、俊成の歌のどの点が原因で趣が浅くなったと言っているか。「身にしみて」の語を使って三十字以内で書け。

F 文学史 (26～28)

(26) この文章の出典『無名抄』の作者名を書け。また、その人物が書いた有名な随筆の名も書け。

(27) 『無名抄』はどのような種類の書物か。またおよその成立時代を書け。

(28) 本文の「五条三位入道」とはだれのことか。また、その人物が撰者をつとめた勅撰和歌集の名を書け。

【テスト直前チェック】この三つ ①「うづら鳴くなり」の「なり」は伝聞・推定。終止形「鳴く」に接続し、鳴き声という耳の証拠がある。体言・連体形につく断定の「なり」と区別する。 ②敬語は三点セット。「詣づ」「聞こゆ」＝謙譲（俊恵から俊成へ）、「思す」＝尊敬（俊成を高める）、「思ひ給ふる」＝下二段で自分をへりくだる。上下がひっくり返らないように。 ③俊恵が批判したのは第三句「身にしみて」だけ。歌全体でも俊成その人でもない。しかも俊成の面前ではなく、あとで長明に内々に語った言葉である。